

1. セミナー分類: NIMS Library Open Seminar
2. セミナーテーマ名: **世界のオープンアクセスと日本—研究への影響**
3. 趣旨説明文:

本セミナーは、3月13日に日本学術会議で行われる公開シンポジウム(同テーマ)をより具体的に、研究を取り巻く環境(図書館事情も含む)から見た内容に編成して行うものです。研究成果として論文を出版し、新しい知見や学識を世に残し、人類の知識として共有するという学問の有り様は、21世紀に入って急速にその姿を変えつつあります。その一例として、公的研究資金の使い方の中に、論文をオープンアクセス出版することを求め、また、その成果として論文情報が産学官で自在に活用することができ、社会に還元しようとする国策が、例えば Horizon2020 に代表されるように欧米で活発に議論されています。研究が学際化し、人と情報がグローバルなスケールで自在に動く今、日本にも欧米の政策の影響が現れ始めています。論文出版を、研究費を使ってオープンアクセス出版(無料で閲覧出来るように)することにとどまらず、誰でも論文著作権を履行できるようにする利活用の仕組み(クリエイティブ・コモンズ)も日本に漂着しています。オープンアクセス化するとは具体的に何を意味するのか?、選択肢としての OA なのか、欧米のような義務としての OA なのか? OA 義務化への制度や評価、効果・検証等、様々な面での議論が研究現場においても必要との認識に立ち、最近事情を知り日々の研究に資することを目的とするセミナーです。

4. 日時: March 14, Friday, 13:30-15:30 pm

5. 場所: 並木共同研究棟 4 階大ゼミナール室(84名収容)

6. 主催: 物質・材料研究機構
7. 対象: 論文執筆にかかる人すべて
8. 参加無料、要事前登録(メール)
9. 資料:
10. プログラム:

13:30 挨拶

13:35-14:25(50分) 講演1: 英語(日本語通訳なし)

**Dr. Ralf Schimmer, Max Planck Digital Library (MPDL)**

**「The Dynamics in Scholarly Communication and the Move to Open Access」**

14:35-15:05(30分) 講演2: 日本語(ただしプレゼン資料は日英対訳版)

**林 和弘氏, 文部科学省科学技術・学術政策研究所 (NISTEP)**

**「クリエイティブ・コモンズとは何か—オープンアクセス時代の著作権と科学者」**

15:15-15:30(15分) 講演3: 日本語(ただしプレゼン資料は日英対訳版)

**谷藤 幹子室長, 物質・材料研究機構(NIMS) 科学情報室**

**「セルフアーカイブというオープンアクセスの選択肢」**

15:30 閉会

## 別紙講師プロフィールと講演要旨

Dr. Ralf Schimmer, Director, Max Planck Digital Library (MPDL)

As Head of Scientific Information Provision at the Max Planck Digital Library, Dr Ralf Schimmer is responsible for the electronic resources licensing program for the entire Max Planck Society and for a broad range of Open Access and other information services. He is a frequent co-organiser of the Berlin conferences on Open Access since 2003 and

manages the Open Access publication charge agreements of the Max Planck Society. Currently he is chair of the Governing Council of SCOAP<sup>3</sup> and an active supporter of Knowledge Unlatched. Known as a frequent speaker at international conferences, Ralf Schimmer was involved in EU projects such as SOAP and PEER, and he has served on the Library Advisory Boards of several major publishers and other national and international committees.



### 要旨

Based on some global and institutional data analyses, this presentation will demonstrate some trends and shifts in scholarly communication. A clear tendency towards Open Access can be shown. Libraries will need to react to this development and to provide services that reflect these changes. The activities in the Max Planck Society will be used as an example. The presentation will also focus on the positioning of research institutions and governments in Europe and the United States.

林 和弘氏、科学技術・学術政策研究所 上席研究官

1968 年香川生まれ、1992 年東大化学卒、同大学院博士課程時から日本化学学会の電子ジャーナルの立ち上げと事業化に携わり、化学から転身、同学会学術情報部課長を経て、現在文部科学省科学技術・学術政策研究所上席研究官。

要旨：

オープンアクセスという言葉聞いたことのある方はどのくらいいるだろうか。オープンアクセスとは学術情報へ障壁なくアクセスできる状態にすることであり、具体的に言えば電子ジャーナルの論文が無料で閲覧できることを意味する。医薬系を中心に、公的資金を得た研究の研究成果に対して、オープンアクセス(パブリックアクセス)化を義務付けるなど、オープンアクセス化を推進する運動は世界中で拡がり始め、オープンアクセス論文や雑誌の数は加速度的に増えだしている。

オープンアクセスを正しく理解することは意外と面倒なことではあるが、言葉としては世界で広く広まっている。オープンアクセスの進展において、クリエイティブ・コモンズの考え方や活動が大きな役割を果たしているのだが、知名度は物性物理分野で長い歴史を持つプレプリントサーバ arXiv に比べると低く、特に日本では研究者のみならず、図書館でも十分に浸透していない。本講演では、論文や書籍をオープンアクセス出版する際に欠かせないクリエイティブ・コモンズに焦点をあてて紹介する。